

男女共同参画センター

活躍する女性を訪ねて【第7回】

さまざまな分野で活躍する佐賀県在住の女性に
前アバンセ館長の村上文(あや)がインタビューしました

佐賀県農業協同組合 佐城地区理事 (小城市)
藤木 智恵子さん



● プロフィール ●

(ふじき・ちえこ)
平成19年にJAさが佐城地区女性部の部長に就任。
JA佐賀県女性組織協議会会長、JA九州地区女性組織協議会の会長を務め、平成21年にはJA全国女性組織協議会の副会長に就任する。
平成22年に佐賀県協同組合女性連絡会会長に就任。
平成23年6月からJAさが(佐賀県農業協同組合)佐城地区理事。
JA組織における女性の参画促進に取り組んでいる。

(インタビュー:平成26年5月)

● お金も居場所もなかった時代

いつも“田んぼ”の中において、地下足袋を履いているような、普通の農家の主婦でした。朝から晩までずっと田んぼに出てばかりで、田んぼのことしか知りませんでした。農協にはお金をおろす時にしか行ったことがなかったくらいです。ところが平成19年の3月、私は集落のJA女性部の班長になりました。私たちの集落では毎年女性部の班長を“くじ引き”で決めていて、たまたま私が“くじ”に当たったのです。これがすべての始まりでした。

一緒に農業をしていた夫が65歳で亡くなり、当時の藤木さんは1人で農作業をしていたという。班長への“当せん”をきっかけに「いい風が吹き始めた」と語る藤木さんに、結婚当初の暮らしを伺った。

3. 2ヘクタールの田んぼを持つ専業農家でした。義理の両親が亡くなるまで、農業の収入は義父の口座に入っていました。つまり、すべての財産を義父が握っているのです。だから、私たち夫婦は自分たちの通帳も印鑑も持っていませんでした。もちろん、手元に現金はありません。何か欲しいものがあったとしても、私たちはお金を持っていないので、自由に買い物ができませんでした。そこで、農作業の合間に少しずつ時間をみつけては、それぞれが土木作業のパートに出かけていました。パートで稼いだ現金をようやく自分たちのものにできたのです。

昭和40年代当時、家には行商の人がリヤカーで来ていました。魚も野菜もすべて“通い帳”に書いての掛け売りでした。その頃は麦の収入がお盆の前に、お米の収入が正月前に口座に入っていたので、日常の買い物の代金は、盆と正月にまとめて支払っていたようです。だから、私たちはふだん現金を見ることがなかったのです。昔の農家では、このように「家で財布がひとつ」というケースは多かったと思います。

田んぼが少ない兼業の農家では、外へ仕事に出かけますから、若い夫婦でも案外お金を持っていたのかもしれませんが、でも、私たちのような専業農家の場合は、若い夫婦が両親から現金を渡されるようなことはあまりなかったのではないのでしょうか。どこかに出かけたり、実家に帰ったりする時、私は義母に「行ってきてもいいですか」などと言うのが少し負担になっていました。

晴れた日に家に居ることはほとんどありませんでした。雨の後で地面がまだぬかるんでいる時でも、家の中に私の居場所はありませんから、しょっちゅう田んぼに出ていなければなりません。まだ機械などがなかった時代で、田植えも稲刈りも全部手でやりました。料理や子育てはどうしていたかという、全部、義母の仕事だったので。私は子どもを3人持ちましたが、自分が子どもの面倒を見ることはほとんどありませんでした。きっと信じられないでしょうが、子どもたちが小さかった頃は、ちっとも私に懐いてきませんでした。子どもと触れ合うことが極端に少なかったからです。

「このままだと私は本当に労働力ではない」。そう思った藤木さんは、「お金が自由にならないなら、せめて田んぼを大きくして自分が生きてきた証にしたい」と、田んぼを5ヘクタールに増やすことを目標にしたという。「いつか息子に譲る日までに」と、少しずつ買い足してきた田んぼは5.5ヘクタールになり、藤木さんは65歳の誕生日に借用地3.5ヘクタールと合わせて息子に譲り渡したという。誕生日は9月25日。稲刈りの直前の田んぼだった。



● 班長の“くじ”を引き当てて

平成19年3月に“くじ”で集落のJA女性部班長(集落単位のリーダー)となった藤木さんは、続いて、「三日月支所部長(支所単位のリーダー)」に選ばれた。そして、程なく「JAさが佐城地区女性部」の部長(トップリーダー)にも選ばれたという。躍進はその後も続いた。

同じ年に、県内の11のJA女性組織で構成される「JA佐賀県女性組織協議会」の“会長決め”がありました。そこでも私は、何も分からないのに会長になったのです。それから2年後の平成21年には「JA九州地区女性組織協議会」の会長になりました。輪番制で、本当は他県の代表が会長になるはずでした。でも、年齢制限があり、もう私しかないということになって…。とうとう九州・沖縄地区8県の女性組織の代表に選ばれました。

ここから先は全国です。九州地区の会長になった平成21年に、「JA全国女性組織協議会」の副会長に選ばれました。全国の6つの地区の代表と若手代表者2名を合わせた8名の互選でした。最初は「ぜひ会長になってください」ということでしたが、「まさか、私にはできませんよ」と言いました。なぜなら私は農業には詳しいけれど、農協の組織のことなどは何も分からないからです。副会長になりましたが、その後、会長が病気になるので、途中から私が会長代行になりました。何もかもが、「たまたま私の時に…」という感じでした。

● 教えてもらった“会長の仕事”

県の女性組織協議会の会長になったばかりの平成19年は、本当に何も分からなくて、総会や会議などの時に「会長のあいさつをお願いします」と言われても、「今日は何の会議だったかな?」、「どんな話をしたらいいのかな?」という感じでした。なにしろ、それまでは田んぼばかりに行っていたのですからね。当時の私のあいさつは「精一杯、努力します」というような内容だったかもしれません。

会長は総会などで議事進行をしなければならなかったのですが、ここでも私は何も知らないもので、どうすればよいか全く分かりませんでした。でも、当時は副会長がベテランだったので、「ほら、ここを読むといいから」と、進行の仕方を教えてもらいました。本当は副会長などを何年か経験してから会長になるほうがよかったのかもしれませんが、たまたま私は違ったのです。



今はもう開き直っているのか、講演でもあいさつでも、ただ、ありのままに自分の言葉で話すだけです。500人や1000人、大会などでは1800人くらいの前であいさつをしなければなりません。「今日は『何を話したらいいだろうか』、『何を着て行ったらいいだろうか』と悩みながら来て、今、ここに立っています」などと言うと、すぐ受けましたね。原稿を読んだことはこれまでに一度もありません。こんな感じでずっとやってきました。別に高学歴でも何でも無い、普通の主婦が急に会長になったので、たぶんみんなが親しみやすいのでしょうね。

写真:第25回JA全国大会式典で演壇に立つ藤木さん(平成21年10月。藤木さん提供)

● もっと女性を認めてほしい

JA佐賀県女性組織協議会の会長として出席する会議で、藤木さんは“紅一点”を経験したことが何度もあったという。

JAの支所長や課長、部長など、本当に周りが男性ばかりだったのです。県の会議でも同じです。「これはどう考えてもおかしい」と思いました。いくら何でも、支所長の中に1人くらいは女性がいなければならないのではと思いました。JAの大会などで、“偉い方々”は、あいさつや祝辞でよく「農業の半分以上は女性の力です!」とか、「女性の皆さんのおかげです!」などと言っています。本当によく聞く言葉です。でも、何かが変ですよ。それなら女性の地位をもっと認めてもらわなければなりません。

「もっと女性の理事を増やさなければ」、「女性もJAの経営に参加していかなければ」という思いがどんどん膨らんでいきました。当時のJAさかの女性の参画状況は、約70名いる理事のうち、女性は4名だけでした。「もっと女性の理事を」と声を上げていくためには、まず私自身が理事にならなければ始まらないのではと思い、私は理事に自ら手を挙げたのです。今から3年前の平成23年6月に理事に就任しました。JAさかの女性理事は、今では8人(平成26年7月から9人)※になりました。

多くの農家の女性にとって、JAとの関わりは女性部だけという場合がほとんどではないかと思います。JAの女性部とは、生産組合や青年部と同じく、組合員の組織のひとつです。これらの3組織は、JAの経営とは直接関係がありません。女性組織の代表者は、ただ「女性部の代表」というだけです。「女性の意見」を代表で伝えることはできても、理事にならなければJAの経営に参画することはできません。女性部の活動の延長線上に理事がいるわけではないのです。

JAさかの場合、理事は農産、経営、総務、信用の4つの委員会に担当を割り振られます。私は信用・共済事業委員会、貸付や保険、自動車ローンなどを担当しています。組合の合併でこれだけ大きくなったJAさかですから、保有する金額も相当なものです。いろいろと勉強もしなければなりません。女性理事の登用とともに、これからはもっと理事も勉強する機会が必要だと思えます。この6月で私は定年になりますが、いろいろな経験をさせてもらって、ありがたかったですね。本当に面白かったです。

※佐賀県内の4つのJA(JAさが、JA佐賀市中央、JAからつ、JA伊万里)における女性理事は合計15名(平成26年7月現在)

● 正組合員化が女性の課題

農業をする人は減り、高齢化がさらに進んでいます。部員の減少は女性部の一番の問題で、生産組合や青年部も同様です。女性部では「フレッシュミズ」といって、45歳未満の女性で構成する組織の活性化を図っていますが、“若い女性”がなかなかいないのが現状です。私が県の会長だった頃は、女性部員が全部で2万4千人から2万5千人ほどいましたが、今では本当に少なくなっていました。1人、2人と抜けていったり、集落単位で10人くらいが一度に脱退したりしています。

女性の正組合員を増やすことも課題です。JAの組合員には正組合員と准組合員がありますが、女性の正組合員はなかなか増えないのです。理事などに女性の登用を進めるためには、女性の正組合員比率を高めていくことも重要になってきます。平成21年度に当時の組合長から「女性の正組合員の大会をしてみたら」と提案された私は、800人規模の大会を初めて開催しました。そこで、次年度にも開催しようとしたのですが、今度は「同じことをしても何にもならないよ」と言われました。「それなら、1800人が入る大ホールでやってやろう」と、さらに大きな正組合員の大会を企画しました。

女性ばかりで話を聞いていてもあまりよくないので、JAの男性職員や生産組合長、青年部にも呼びかけました。その前に、国際協同組合同盟(ICA)のアジア太平洋地域の会議が中国であり、全国女性組織協議会の副会長として参加しました。その時に一緒だった全国農業協同組合中央会(JA全中)の茂木会長に、「今度、1800人の女性の正組合員の大会をやりますから、ぜひ来てください」と言ったら、多忙にもかかわらず、日帰りの強行軍で佐賀まで来ていただきました。歴代の全中の会長が単位JAの行事に出席されるということはほとんどなかったようです。周りからは「前代未聞だ」と驚かれました。

JAさかの理事になってからは、山口県での1泊2日の研修旅行に1300人の参加者を集めました。各地の直売所を見て回ったり、人気タレントの公演を観たりするもので、JAグループの旅行会社の企画です。私も経営者の1人になっていたので計算をしてみました。1人あたりの旅行代金2万5千円くらいでは公演会場に入る1300人をなんとかして集めなければ採算が取れないと思ったのです。誰からも「それは無理だ」と言われましたが、「決めたからにはやります」と言って、目標を達成しました。「かあちゃんの周りには、よく人が集まってくるなあ」と息子に言われますが、いつも本当によく集まってもらえると思います。

コミュニケーションを重視しているという藤木さん。何か行事をするたびに、「今日は来てくれてありがとう」、「お疲れやったね」と、各組織のリーダーたちへの電話連絡を欠かさないという。

● 楽ではない“男女共同参画”

私は一所懸命になって「女性も参画しましょう」と言っていますが、女性の中には「そんなことは男に任せておけばいい」と言う人がいたり、男性の中には「女がそんなにしなきゃって」と言う人がいたりします。何年かやってみて、つくづく男女共同参画は容易ではないと思いました。「男に任せておけばいい」と言う女性がいる限り、女性の参画はなかなか先に進まないのではないのでしょうか。「やっぱり私たちが立ち上がらなくては」と、女性自身が強く思わなければならないのです。

女同士での「足の引っ張り合い」は確かにあると思います。よく「出る杭は打たれる」と言いますが、それは女も男も同じことだと思います。私は「出る杭は打たれるけど、出すぎた杭は打たれない」と言っています。女性も周りの人たちに負けることなく、いろんなことにチャレンジして出すぎていてほしいですね。そのためには組織をしっかり固めることが大切です。「たたかれなくらいに組織で固めてね。組織の力は数だからね」と言っています。



出すぎた杭は、打たれないかわりに簡単に引き抜かれてしまう可能性があります。でも、ちゃんと地盤を固めていけば引き抜かれることはありません。「あなたのためならやりますよ」というような人を周りにたくさん作っておかないと、自分だけ“偉いところ”に行ったとしてもすぐに足を引っ張られてしまうのではないかと私は思います。トップの思いが伝わりやすい組織作りが大切で、そのためには、日頃からよくコミュニケーションを取っておかなければなりません。

JAさがもこれだけ大きな組織になりましたから、すぐには変わらないと思いますが、まずは女性の理事が全体の3分の1くらいになって、そして、その理事さんたちにはしっかりと勉強してもらって、どんどん意見を言ってくれるような人材になってほしいですね。

私はこれまでに自分がとても大変なことをしたとか、ものすごいことをしたとは少しも思っていない。全然、大したことはしていないのです。普通の農家の主婦の目線で、当たり前のことを

当たり前のように意見を言ってきただけです。この7年間の経験は私の大きな財産です。平成19年に集落の班長になったことからここまで来ました。すべての方々に感謝しています。

インタビューを終えて

「後に続く女性へのメッセージを」とお願いしたときに、「チャレンジしてほしい。出過ぎてほしい。組織固めて」という言葉が出てきました。女性の中で「男にまかせておけばいい」という人がいて、男性も女が出しゃばるのを嫌う人がいる中で、女性の意見を組織に反映させるために、あえて出過ぎるチャレンジが必要です。ここまではよく言われるのですが、「組織固めて」というのが、さすがです。出過ぎた杭は、簡単に引き抜かれてしまう可能性があるの、足元を固めて、周囲に支持してくれる人をいっぱい作っておかないといけない。「たたかれないくらいに組織力を固めてね。組織は力、数だからね。」とも語っていました。このリアリズム！！これは、女性のみならず、何か変革を起こそうという人に共通して必要な心構えだと思いますが、容易ではありません。特に組織を固めるのが難しく、説得力や人徳が必要で、これこそがリーダーシップです。

藤木さんは、最初にくじで集落の班長に当たって以来、わずか2年でJA全国女性組織協議会副会長に就任しました。こうした活動の過程で、実際に女性が農業の半分以上を担っているのに、JAの経営に参画する理事に女性が極端に少ないことに違和感をもちました。女性理事を増やすように主張し、自身もJAさかの理事になりました。いろいろ勉強が必要ですが、面白いとのこと。女性の正組合員を増やす努力もしています。1800人規模の大会を開き、元気の出る男女共同参画の講演や、生産でがんばっている農家の好事例の発表などを行って盛り上がったそうです。本人は、たいしたことをしていない、組織の力だと言いますが、佐賀で1800人を集めるのは大変なこと。「藤木さんが言うなら」と、関係組織の責任者も力を入れてくれる。まさに組織を固めているわけで、周囲の人を動かす魅力、実力があるということです。日頃から、対話を通じ、自分のことをよくわかってもらい、何か行事があるたびにお世話になった人には電話してしっかりお礼を言うなど、コミュニケーションを大事にしているそうです。

藤木さんは、専業農家のいわゆる“嫁”として、機械化される前の厳しい肉体労働をしてきています。長い下積みが続き、「お金が自由にならないなら、せめて自分が生きた証として、息子に引き継ぐときには農地を増やしておこう」と決心し、実現しています。すごい発想で、黙々と働き、実績を目に見える形で残しています。これまで、様々なところでこのような姿勢で十二分に役割を果たしてきたでしょう。だから、いざというときに多くの人が集まり、協力してくれるのだと思います。また、家族経営協定の意味がよくわかります。従来、農家はサラリーマン家庭と違い、毎月の定期収入がなく、収穫が終わってから一度に家の通帳にお金が入り、それを家長が管理するというスタイルになりがちでした。これでは若い世代、特に女性は働くだけで報酬がないという辛い立場になります。これを見直し、しっかり話し合っ、協定でそれぞれの家族の地位を確保する意味は大きいでしょう。



このインタビューでは、女性が適切に評価され、活躍するために必要なことやそのための心構えなど、多くの示唆がえられました。また、何よりも、周囲の信頼を得るため努力し、実力をつけることの大切さを実感しました。「私は普通の農家の主婦だ」と言われますが、傑出したリーダーの藤木さんに深く敬意を表する次第です。

アバンセ館長 村上 文



 [アクセス・交通機関のご案内](#) ▶

 [お問い合わせ/ご意見・ご要望](#) ▶

アバンセ
佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター

〒840-0815
佐賀県佐賀市天神三丁目2-11(どんどんの森内)

TEL:0952-26-0011 FAX:0952-25-5591

【指定管理者】[公益財団法人 佐賀県女性と生涯学習財団](#)

Copyright (C) 2011 Avance All rights reserved

開館時間

火曜～土曜日:8時30分～22時00分

日曜・祝日:8時30分～17時00分

(ホールは22時00分まで)

休館日

毎週月曜日(祝日も含む)

12月29日から翌年1月3日まで